



日本史⑫ (日本書紀)

3月③のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2024年3月21日(木)

日本書紀は、720年(養老4)、国家的な自覚に基づいて、奈良時代に完成した日本最古の勅撰の正史30巻である。

舎人親王と太安麻呂らの編で、神代から持統天皇までの朝廷に伝わった神話・伝記・記録などを漢文で記述した編年体の歴史物語である。

編纂事業の開始及び過程については資料が乏しく不明であるが、成立の動機は、大陸や朝鮮との関係をふまえての国家意識からの政治的要求であったと思われる。神代や古い時代の巻は、多量の神話、伝説を含み、また歌謡128首を持点など、上代文学史上においても貴重な作品である。

巻1・2は神代の記述に充て、巻3以下は神武天皇から歴代の天皇の事績を示している。持統天皇(697年)に至る巻3以降は編年体の史体を取り、年月日にかけての記述となる。

神武天皇即位の年を紀元前660年に設定し、年時不明な伝承をその間に配置したため、各所に矛盾が生じている。

記事の素材としては、「帝紀」、「旧辞」の伝承、「百濟記」などの朝鮮関係資料、寺院の縁起など多様なものが用いられ、編纂時に近い7世紀の記事については、政府の記録の外、外交、戦乱の記述には個人の手記も用いられている。

天照大御神のもと、ニニギノミコトが筑紫の日向に降臨し、カンヤマトイワレビコノミコトが東征し、大和橿原で即位して第一代神武天皇となり、国の基を開いたと記されている。

壬申の乱で、近江朝廷を倒して政権の座についた天武天皇は、強く国家設計の理想を持ち、帝紀及び上古諸事の記定を完成させ、社会的秩序維持のために、「八色の姓」を制定した。このような政治姿勢を考え、日本書紀の編纂を天武天皇の意思に基づくものとする見解が一般的である。

しかし、日本書紀編纂の実質は文武天皇の時代(702年頃)に政治の実権を担っていた藤原不比等の提言に成るものであったという説も有力である。

明治以降、記紀は国家・皇室の由来を示す聖典として国民の教化に利用された。1910年代以降、津田左右吉によってその文献学的研究(記紀の歴史は、官廷史であり、事の紀文ではない)が開始されたが、後1940年(昭和15)に至り、津田は弾圧を受けた。

第二次大戦後は、考古学、神話学、文化人類学など関連諸科学の進展や、金石文や木簡などの発見で、その研究は新しい段階に入っている。

参考：(日本史史料集 山川出版社、日本通史 復旦大学出版社)